

近くて遠い国

青森県青森市立筒井中学校

二年 小笠原 彩 佳

「ここは、日本なのか――。」

この夏、私は母と祖母と一緒に大阪へ旅行に行った。空港に到着してすぐ、私の耳に飛びこんできたのは、テンポがよく、楽しい関西弁ではなく、わけのわからない中国語だった。

空港からホテルへ、行く先々で日本語よりも中国語の方が多く聞こえた。そして、買い物をしていても、日本人である私が、店員さんに中国語で話しかけられる始末。私は、

「なんか中国に来たみたい、おもしろい関西弁を楽しみに来たのに：何かいやだなあ。早く帰りたい。」
 と思ってしまった。なぜなら、私はこれまで中国に対して良いイメージを持っていなかったからだ。

日常、テレビで放送される中国の情報は良い話題が全くといっていいほどない。反日デモや日中間の政治の話題も含め、画面から聞こえてくる中国語は誰もが皆、怒鳴っているようで、日本を憎んでるようにはかと思えない。中国人は日本人が大嫌いなんだ、怖い人達なんだと思っていた。だから私も、中国語を聞いただけで、鳥肌がたった。

ホテルでの朝食の時のことだ。食べきれない量の料理をお皿に盛り、自分のテーブルに運ぶ中国人を

見て不快感が増した。日本人はそんなことはない。食べ物を粗末にしてはいけない。作った人の気持ちを考えて、きれいに食べさせる。中国人は何て失礼な人達なのだろう。中国人なんてやっぱり嫌いだ、とても嫌な気持ちになった。そして、そのことを母に話した。すると、

「作ってくれた人に悪いから、残さず食べるのが日本の文化だけれど、中国に行くと、全部食べてしまうと作ってくれた人が料理が足りなかったと心配してしまうから、あえて残すというのが中国の昔からの礼儀なんだって。中国にはその文化の名残がまだあるんじゃないかな。」

と私をたしなめるように母は言った。そして続けて、「中国人だって、日本人に嫌な思いをさせるためにそうしているんじゃない、文化を受け継いで今の状況があるんだよ。日本人だって景気が良かった時代、多くの旅行者が海外に旅行に行っているいろんな町を汚した時代があったの。それで海外からひどく批判されたこともあった。でも、たくさんさんの経験をして、今はとてもマナーのいい国になったんだよ。」

と教えてくれた。私は改めて朝食を食べている中国人を見た。言葉はわからないけれど、楽しそうに笑顔で朝食を食べている。それを見て、私は気づいたのだ。私は自分の感情だけで判断し、毛嫌いしていたことに――。ユニークで温かい関西の言葉や文化に触れることだけを期待してきた大阪で、思いがけずあふれ返る中国人の観光客と中国語に、本当にうんざりしていた。そして私の中で、テレビなど見る憎しみがこもった中国語だけを聞いて、中国のことを何も理解することなく、一方的に「嫌い」と決めていた。中国に対する偏見があったのも事実だ。日本人が過去にどれだけのことをしたのか、私はよくわからない。よく知りもしないで批判ばかり

していたのではないだろうか。

二日目、朝食を終え、エレベーターに乗った時、私達の後に中国人の家族が乗り込んできた。私が「開く」のボタンを押していると、素敵な笑顔で「シェイシェイ」と声をかけてくれた。さ細なことだけれど、中国人と言葉を交わしたことで私の中にポツと明かりが灯ったように感じた。同時に、勝手に嫌な印象を持っていたことを深く反省した。きつと外見から見れば、中国人も日本人も同じ人種なのだ。中国や韓国は、日本からすれば、お隣りさん。それなのに、互いを理解できず、歩み寄れないのは悲しいことだ。戦後七十年――私は戦争を知らない。難しい政治の話も歴史も、自分とは関係のないこととしていた。でも、それではいけないのだ。

私は、この旅を通じて、これからは自分の目で見たこと、経験したことを信じて、人と関わっていくことと心から思うことができた。そして先入観ではなく、人には誰にでも感情があり、人々が生きてきた文化があるということを忘れずに生活していこうと思う。そして先入観を持たず、互いの文化を理解し、笑顔で誠実に接していけば日本に対する悪い先入観も取り除いていけるのではないだろうか。そのためには、身近な国として関心をもつこと、両国の歴史についてもっと勉強していくことが大切だ。私自身がまずはその一歩を進んでいきたい。

作文を書くに当たって

私がこの作文で伝えたい願い。それは、日本人がもっと中国のことを文化から理解してほしいということです。なぜなら私自身がすぐ近くの国なのに何も知らず、反感の目だけで見ていたからです。でも、そんな時に文化の違いを教えてくださいました。今回はその私の心境の変化を作文のテーマとしました。